

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月 17日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520509

研究課題名（和文）

英語における統語構造の適応的変化-機能範疇の発達を中心に

研究課題名（英文）

The Adaptive Change of English Syntactic Structure: The Rise of Functional Categories

研究代表者

保坂 道雄 (HOSAKA MICHIO)

日本大学・文理学部・教授

研究者番号：10229164

研究成果の概要（和文）：本研究では、英語の統語変化を経験的証拠として、英語が通時的に適応的変化をしてきたことを論証した。具体的には、接続詞の発達、補文標識（that）の発達、二重目的語構文における構造的格認可の発達、分裂文における単一節構造の発達等を言語資料とし、英語における通時的変化が相互に関係していることを実証することができた。また、こうした言語変化は、言語の小進化として捉え直すことが可能であり、新たな言語進化研究の可能性を示すことができた。

研究成果の概要（英文）：This research investigated how adaptively English has changed in its history on the basis of its syntactic change. Specifically, dealing with the development of conjunctions, the rise of complementizer *that*, the change of structural licensing in the Double Object Construction and the development of a monoclausal structure of cleft constructions, I demonstrated how closely these linguistic phenomena were related. In addition, I proposed the possibility of recapturing these phenomena as the microevolution of language.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：英語史、統語変化、言語進化、機能範疇

1. 研究開始当初の背景

これまでの統語変化研究は、大きく3つに分けることができる。1つは、Jespersen 等

を代表とした伝統文法的手法で、言語事実を詳細に調査し、その変化の過程をできるだけ厳密に記述するものである。2つ目は、

Lightfoot 等を代表とした生成文法理論に基づく言語変化の理論的説明で、特に子どもの言語獲得時に大きな変化が起こるという仮説を提案している。3つ目は、Traugott 等の文法化理論に基づく認知言語学的説明で、言語使用の際に生じる語用論的推論を介在に変化が起こると説明するものである。いずれの方法も、優れた研究方法であるが、英語の統語変化を説明するためには、より総合的な手法が求められる。

また、多くの研究者が指摘するところであるが、他の言語に比べ、英語は特異な変化の過程を経た言語である。屈折語尾の消失、助動詞（法助動詞、DO、HAVE、BE など）の発達、虚辞(it, there)の出現、語順の固定化など、英語の統語構造は比較的短期間で大きな変化が生じた。こうした変化は、クレオール言語化とも共通する特徴を持ち、言語進化の面からも大変貴重な言語資料である。従来の研究では、こうした変化の側面を、個別に研究することはあったが、そこに共通するメカニズムが存在していることを論ずることは困難であった。本研究では、適応的言語変化の視点から、こうした英語の統語変化が、機能範疇 (FP) の創発として統一して説明可能であることを論じていく。

2. 研究の目的

本研究は、英語の統語変化（主に機能範疇 FP の発達）に関して、生成文法、認知言語学（特に文法化理論）、進化言語学（特に自己組織化モデル）の知見に基づき、その要因と過程を説明しようとするものである。特に、従来の研究が、それぞれの研究パラダイム内での閉じた説明となっているため、変化の側面の説明に終わっている点に着目し、各パラダイムを超えた説明の可能性を追求するものである。具体的には、英語において、FP の構造が、適切なコミュニケーション活動を維持させるために適応的に発達してきたことを、通時的言語資料を通して、実証的かつ理論的に論じるものである。

具体的な言語事象としては、英語の補文標識 *that* の出現や接続詞 *when* の発達、二重目的語構文における格認可方法の変化等を、動的機能投射構造仮説に基づき、検討していく。

3. 研究の方法

本研究を遂行するにあたり、The

York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose(YCOE), The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English (PPCME2), The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English, Dictionary of Old English Corpus(DOE Corpus)及び Oxford English Dictionary (OED)の例文コーパス等を利用するほか、独自に作成した通時的英語パラレル・コーパスを用い、理論的側面から予測された仮説の検証を行った。また、これまで出版されている各種研究も基礎資料とし、仮説の妥当性について慎重な検討を行った。

4. 研究成果

各年度における研究成果は下記の通りである。

平成 22 年度研究成果

(1) 言語コーパスの基礎資料の作成

当該年度は特に、古英語・中英語と現代英語のパラレル・コーパス作成の基礎資料として、以下のテキストを検索可能な PDF ファイル化した。

An Old English Martyrology, Anglo Saxon Charters, Anglo Saxon Wills, Apocrypha, Bede, Boethius, Gregory's Pastoral Care, Heptateuch, Holy Rood Tree, Leechdoms, Pride and Prodigies, Ælfric's Lives of Saints, etc.

(2) CP 構造の適応的变化に関する研究

以下の論文において、具体的な CP 構造の発達について研究を行った。

まず、“The Rise of Subordinators in the History of English: The Riddle of the Subordinator *when*” では、接続詞 *when* について、その特性を他の前置詞由来の接続詞 (*before* など) と異なる点に着目し、動詞句内部から移動した副詞的要素が補文標識として再分析された過程を構造的観点から論じた。また、その際、英語の接続詞の誕生には、3 つの道筋 (prepositional pathway, nominal pathway, adverbial pathway) が考えられ、いずれも通時的変化の過程の中で、同じ補文標識に再分析されたため、現代英語では同一の範疇として分析されるようになったと主張した。

次に、“The Rise of the Complementizer *that* in the History of English” では、英

語の補文標識 *that* の発達について、接続詞の *that* と関係詞の *that* を比較し、その構造的共通性に着目し、その起源と発達について進化言語学的側面から論じた。その際、現代英語の名詞節と副詞節を導く接続詞の *that*、関係代名詞の *that*、関係副詞の *that* の通時的過程を詳細に分析し、いずれも同格構造を有していることを発見し、新たな分析の可能性を提示することができた。

平成 23 年度研究成果

(1) 古英語・中英語と現代英語のパラレル・コーパスの作成

前年度収集した資料を基に、古英語・中英語と現代英語を容易に比較できるように PDF 化し、*The York-Toronto-Helsinki Corpus of Old English Prose*, *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English*, *The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English* 等の文法標識付コーパスを有効に利用できる環境を整えた。

(2) 通時的個別研究

① 動的機能投射構造

本研究の大きな枠組となる動的機能投射構造に関する仮説をまとめ、4 月の英語学会の国際シンポジウムにて発表を行った。また、11 月出版された『日本語学』に「格」の機能投射構造を中心に、論考をまとめ、発表した。

前者の研究は、これまで CP や TP のように固定的に考えられてきた機能投射構造を、可変的な構造として捉え直す試みで、英語の通時的変化を資料に、V-to-I movement の消失、主語の義務化、虚辞 (*it*, *there*) の出現、助動詞の発達等の現象を機能投射構造 (FP) の動的変化として説明できることを論じた。

また、後者の研究は、言語変化を言語の適応的小進化として捉え、英語における主格主語の義務化や語順の固定化等の現象を説明する。加えて、日本語の格助詞の発達もまた、言語機能を明示的に示す方法として存続した結果と考え、言語の小進化的側面を示しているものと論じた。

② 二重目的語構文

当該年度の具体的なテーマの 1 つとして、二重目的語構文の発達を通時的に考察し、英語の機能投射構造の変化が英語特有の構文現

象を引き起こしていることを、ドイツ語、フランス語、日本語等との比較も交えて、論証した。また、その成果は、8 月の津田塾大学でのシンポジウムにて発表を行った。

具体的には、英語二重目的語構文についての AGREE を用いた極小理論の説明は十分とは言えず、顕在的移動を前提とした Spec-Head という Local な構造における格の認可が依然必要であることを、英語の二重目的語構文の歴史的变化を通して論じたものである。なお、古英語期には、ドイツ語同様、間接目的語、直接目的語共に内在格で、VP 内にて格の具現化が行われ、Scrambling も許されていたが、格形態の消失とともに、機能投射を利用した構造的な格認可に移行し、語順も固定化したと主張した。加えて、英語与格構文の発達については、与格を認可する機能投射構造が確立すると同時に、前置詞 *to* による格認可も行われるようになったとして説明できると論じた。

平成 24 年度研究成果

当該年度は、言語の基本モデルについて、これまでの生成文法の考え方を再考し、新たな視点から考察を行った。その結果、これまでの統語部門から意味部門・音韻部門へと分化するモデルでは言語の多様性を説明するには不十分であり、言語の内在化の結果である「思考の言語」と言語の外在化の結果である「伝達の言語」という 2 つの段階を区別するモデルが必要であると論じた。なお、本研究は、平成 24 年 12 月に開催された日本大学英文学会学術研究発表会にて、その成果を発表した。

また、具体的な研究としては、Case と Agreement の問題を中心に、英語の分裂文の歴史について考察を行い、これまで説明が困難であった前置詞句等を焦点とする分裂文の派生について、*biclausal* から *monoclausal* への変化に着目し、説明を行った。なお、本研究は、平成 24 年 9 月に、慶應大学で開催された *The 4th International Conference of the Society of Historical English Language and Linguistics* において、その成果を発表した。

なお、本研究の成果は、現在言語研究の大きな流れの 1 つになっている生物言語学への貢献が期待できるものでもある。特に、新たな言語モデルの提案は、チョムスキーが提唱

する「言語の普遍性」について、これまでとは異なる視点を提供することを可能とする。具体的には、「言語は、約 5 万年前の出現時以来、その基本的構造に変化はない」というチョムスキーの主張を、「思考の言語」という視点から説明できる点で、有益な議論を提供できるものとする。今後は、格、語順、機能投射構造等の詳細な分析を行い、本主張を具体化する研究を続ける予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

1. 保坂道雄, 「言語変化と言語進化: 格をめぐって」, 査読無, 『日本語学』11月号, 2011, 34-42.

2. Michio Hosaka, "Review: Bernd Heine and Tania Kuteva (2007) *The Genesis of Grammar: A Reconstruction*", 査読有, *English Literature English Number* 51, 2010, 134-145.

3. Michio Hosaka, "The Rise of Subordinators in the History of English: The Riddle of the Subordinator *when*", 査読有 *Aspects of the History of English Language and Literature*, 2010, 321-330.

4. Michio Hosaka, "The Rise of the Complementizer *that* in the History of English", 査読有, *Language Change and Variation from Old English to Late Modern English*, 2010, 59-78.

[学会発表] (計 4 件)

1. 保坂道雄, 「思考の言語と伝達の言語」, 日本大学英文学会 2012 年度学術研究発表会, 日本大学, 2012 年 12 月 8 日

2. Michio Hosaka, "A Diachronic Approach to Cleft Constructions in English", The 4th

International Conference of Society of Historical English Language and Linguistics, 慶應義塾大学, 2012 年 9 月 3 日

3. 保坂道雄, 「二重目的語構文再考」, 招待発表, 津田塾大学 言語文化研究所 「英語の共時的及び通時的研究の会」 発足二十五周年記念大会, 津田塾大学, 2011 年 8 月 28 日

4. Michio Hosaka, "The Dynamic Change of Language Structure", 招待発表, The 4th International Spring Forum of the English Linguistic Society of Japan, 静岡大学, 2011 年 4 月 23 日

[図書] (計 1 件)

1. 保坂道雄, 「二重目的語構文再考 : Dynamic Functional Projection の視点から」, 『生成言語研究の現在』, ひつじ書房, 2013, 67-93.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

保坂 道雄 (HOSAKA MICHIO)

日本大学・文理学部・教授

研究者番号 : 10229164

(2) 研究分担者

()

研究者番号 :

(3) 連携研究者

()

研究者番号 :